

シャルル＝ルイ・フィリップと世紀転換期のパリ

中村能盛

(フランス文学専門／博士後期課程)

1. 世紀転換期のパリ・モンパルナスと『ビュビュ・ド・モンパルナス』

短編及び中編小説の名手であったシャルル＝ルイ・フィリップは1901年に『ビュビュ・ド・モンパルナス』を上梓した。『フランス文学案内』によればフィリップ自身の体験を題材とした小説である事を指摘している¹。

最初にフィリップが生前に綴った『若き日の手紙』の中で、『ビュビュ・ド・モンパルナス』の下地となる手紙文が記載されている事に注目したい。

[...] Je t'avais parlé d'une petite amie dont je fis la rencontre le lendemain du 14 juillet. Je l'ai revue plusieurs fois depuis ; elle est très belle, très douce et surtout très bonne. Je l'aime un peu paternellement parce qu'elle est malheureuse et fraternellement parce qu'elle est ignorante et simple. Or, mon ami, depuis quinze jours voici qu'elle est à l'hôpital, bien malade. Voilà huit jours qu'elle ne m'a pas écrit, et j'ai peur. J'ai peur qu'elle soit morte ou malade à mourir. C'est un sentiment affreux. Elle m'a écrit de l'hôpital deux pauvres petites lettres tendres et maladroitement. Elle ne sait pas écrire ni mettre l'orthographe[sic] mais elle sait dire de ces choses qui sont splendides lorsque c'est un cœur ignorant qui les dit. Et ces deux lettres ont fait de mon amitié d'auparavant un sentiment très aigu et très tendre. J'ai bien peur. Si je n'avais pas de lettre d'elle demain, c'est qu'elle serait à l'agonie. Je ne

¹ 篠沢秀夫『フランス文学案内』、〔朝日出版社〕、1980年、p. 237

sais pas si tu comprends bien cette situation. Tous les malades d'hôpitaux m'émeuvent, mais cette petite que j'estime me trouble affreusement. Elle était merveilleusement douce, et dans son âme de petite Parisienne cette douceur était devenue une exquise politesse. Je l'ai entendue demander pardon à une bonne de restaurant (qui était demoiselle) parce qu'elle l'avait appelée, sans faire attention, Mademoiselle, au lieu de l'appeler Madame. [...] Elle était très intelligente et très délicate. La première fois que je lui montrai les quatre platanes dont j'ai parlé dans l'Enclos, elle m'avait dit : Ça fera de belles planches quand on les aura abattus, réponse qui m'avait vexé. Or, depuis, en deux ou trois séances je lui ai fait comprendre la beauté d'une chose et d'un paysage indépendamment de son utilité, si bien que le soir quand j'allais la conduire chez elle, elle me disait de jolies vérités belles sur la nuit, sur la Seine nocturne, sur les feux, sur le ciel, sur l'air et sur la bonté. J'aurais voulu l'élever jusqu'à moi, lui donner une belle âme de peuple. Elle était fleuriste et très bonne ouvrière. Fleuriste, c'est un métier idéal dans lequel on met beaucoup de goût. En peu de temps, je t'assure que j'aurais développé ses sentiments jusqu'à en faire des sentiments très nets, très purs et très délicats. Je lui aurais fait aimer la vie merveilleuse de ceux qui travaillent².

[...] 7月14日の翌日、私は巡り合った恋人の事をあなたに話した。それ以後、私は何度か彼女と再会した。彼女は非常に美しく、優しく、とりわけ性格が良い。私は彼女が不幸なので少し父親の様に、そして彼女が無知で単純なので少し兄の様に彼女を愛している。ところが2週間前から彼女はとても病んで、病院にいる。8日前から私に書かなかったのも、私は恐れている。彼女は亡くなったのか、あるいは病気で死ぬほどなのか、という事がとても心配だ。それは恐ろしい気持ち

² Charles-Louis Philippe, *Lettres de jeunesse : à Henri Vandeputte*, Nouvelle revue française, 1911, pp. 94-96

だ。彼女は病院から 2 通の哀れな小さく、愛情のこもったぎこちない手紙を書いた。彼女は綴りを記載する事も、書く事も出来ない。けれども彼女は、無知な気持ちを言う時に素晴らしく現実を言う事が出来る。それからこの 2 通の手紙は、私の友情をととても鋭くそして優しい愛情にさせていた。私はとても恐れている。もし明日、彼女の手紙が来ないならば彼女は死に瀕しているのではないか。私はあなたがこの様な状況を良く理解出来るかどうかは分からない。病院にいる全ての病人が私に感銘を与えているが、けれども私を尊敬しているこの子は私をひどく不安にさせている。彼女は素晴らしく優しく愛しいパリ娘の心の中で、この優しさは洗練され上品になっていた。私は彼女がレストランの女中に(その女性は未婚だった)マダムと呼ぶ代わりに注意せずマドモアゼルと呼んでいたものだったので、謝っているのが耳に入った。[...] 彼女は極めて賢明で繊細だった。私が「囿繞地」の為に描いた 4 本のプラタナスを初めて彼女に示した時に、彼女は「これらを切ったとしたら、見事な板が取れるでしょう」と返事して、私を当惑させた。ところがそれ以後 2 度、3 度、私は有用性と無関係の出来事や風景の美しさを彼女に理解させる事が出来た。その結果、ある夜、彼女の家に来ていく時に、夜のセーヌ川、ライト、天気、空気、そして善意に関して気の利いた素晴らしい真実を私に言っていた。私は彼女を自分の高さにまで上げ、彼女に人々の美しい心を与えたいと思っていた。彼女は花売りでとても優れた工員だった。花売り、それは大変、趣味を身に付ける理想的な職業である。少しの時間で、私は彼女の感情を、とても清潔な純粋でそして繊細な物に発展させる事が出来た事をあなたに断言する。働く者の美しい生活を愛する事を彼女に教える事が出来たのではないか [...] ³。

フィリップは世紀転換期に『若き日の手紙』の文中に登場する「女性」

³ 筆者訳

との出会いと体験した出来事を参考にして、小説『ビュビュ・ド・モンパルナス』を執筆する。劇中ではパリの場末で働く女性ベルトとベルトの交際相手の男性ビュビュ、そしてベルトと出会った青年ピエールの3名を中心に据えて物語が進行する。

フィリップが執筆した作品の中でもとりわけ、『ビュビュ・ド・モンパルナス』には貨幣及びフランの金額を付加した説明や会話が数多く登場する事に注目したい。

[...] Il peut entrer comme dessinateur à cent cinquante francs par mois dans une compagnie de chemins de fer [...] ⁴.

[...] 彼は1か月に150フランで、製図家として鉄道会社に入社する事が出来た ⁵。

フィリップは、事実を題材として『ビュビュ・ド・モンパルナス』の各場面を描写しているのであれば、20世紀元年に出版されたフランス文学である本作品は、当時のパリの物価や人々の暮らしをセミ・ドキュメンタリーで描いた作品と解釈する事が出来る。

2002年にフランス国内では、貨幣がユーロへと完全に切り替わり、フランは使用されなくなったが、1901年当時のフランを現在の日本円に換算するとおおよそ幾らになるのだろうか。

本論では1901年のフランス・パリの物価と2010年代の日本の物価を対比させる事で、100年以上が経過したフランス文学をより身近に解釈する事を狙いとする。

2. ジェルミナル・フランの誕生

フランスのフランは1360年に国王ジャンII世により誕生したが、ナポ

⁴ Charles-Louis Philippe, *Bubu de Montparnasse*, Grasset, 2005, p. 18

※本論では書名とページ番号のみを表記する。

⁵ 筆者訳

レオンによるフランス革命後にフランは大きな転換期を迎える事になった。

[...] 第1統領ナポレオンがクーデタの準備に協力したパリの銀行家たちの後援をうけるのは1799年からだが、彼はそうすることによって第1共和政の財政的破綻に終止符をうつ貴重な支点を確保した。アシニア紙幣の発行から土地債券へ、そして破産へとすすんだ過去10年間の財政政策はすべて不成功におわり、1797年－1799年には戦争と外国人の陰謀によってその失敗が絶頂に達していた。そこでナポレオンは、国家財政の再編成を断行して減債基金を創設し、ついでペルゴーやマレなどの助力をえてフランス銀行を設立した。このフランス銀行には、1803年から要求に応じて金貨を支払う紙幣の発行にかんする独占権をあたえた。最後に、1803年春(共和暦11年芽月7日)「ジェルミナル・フラン」が新たに鑄造され、純金320ミリグラムを含むこのフランが、フランス貨幣として第1次世界大戦後のインフレまで安定した価値を保つことになる[...]⁶。

ナポレオンが1803年に制定したジェルミナル・フランは第1世界大戦によって終止符を打つ迄は、金本位制によって110年近くフランス国内の物価が変動していなかったという事実が浮上する。

3. バルザックの作品における金銭の表記

1803年から1913年迄の時代に多数の作品を発表した作家といえバヴィクトル・ユゴー、バルザック、モーパッサン等が挙げられよう。

バルザックが執筆し、91編により構成された『人間喜劇』は、19世紀のフランスと登場人物の心理を緻密に描出した作品であった。

従って前述迄の考察から『人間喜劇』の頃の物価と、『ビュビュ・ド・

⁶ ジョルジュ・デュビイ、ロベール・マンドルー共著(訳・前川貞次郎、他)『フランス文化史3』、[人文書院]、1970年、p. 39
漢数字は算用数字に書き改めた。

モンパルナス』の頃の物価が金本位制によって対等であったと解釈する事が出来る。

バルザックに関する先行研究を精査していく過程において、ロジェ・ピエロは文学作品における物価や貨幣に関して次の様な見解を示していた。

[...] Les indices publiés par l'INSEE peuvent néanmoins avoir une valeur indicative approchée : À la fin de 1992, 1 franc de 1840 valait 21,69 F [...] ⁷.

[...] INSEE(国立統計経済研究所)によって公布された指数はそれにも関わらず、概算価値を有する事が可能である。1992年の終わりには1840年の1フランは21.69フランの価値があった[...] ⁸。

1992年当時の1フランは日本円に置き換えると幾らになるのだろうか。為替レートは常に変動するが、1992年12月31日の毎日新聞によれば前日の12月30日のフランは23.11円であった⁹。1803年から1913年迄の1フランを1992年の日本円に換算すると、21.69フラン×23.11円=501円25銭であるが、1円以下を切り捨てると501円である。

本論の執筆時期は2015年であるが、筆者の記憶の限りでは嗜好品である煙草を除けば国内の衣食住に関する物価は、23年間で大幅な変動が生じていない状況である。従って本論では1992年の物価と2015年の国内の物価は同等と解釈する。

4. 『ビュビュ・ド・モンパルナス』とフラン

当時のフランスの貨幣を確かめておきたい。貨幣はフランであったが、フラン以外に20分の1フランに相当するスー、そして100分の1フラン

⁷ Roger Pierrot, *Honoré de Balzac*, Fayard, 1994, p. 9

⁸ 筆者訳

⁹ 毎日新聞編集部『毎日新聞』、〔毎日新聞社〕、1992年12月31日、9面

に相当するサンチームが存在していた。

実際に『ビュビュ・ド・モンパルナス』に記載された給与、家賃、食費等を現代の日本円に換算する。

4-1. 給与

[...] Son seul refuge était son ami Louis Buisson auquel il s'allia dès le premier jour. Louis Buisson avait vingt-cinq ans et travaillait comme dessinateur dans le bureau de Pierre Hardy. [...] Il pensait : « Je gagne cent quatre-vingts francs par mois. Je suis comme un homme du peuple et je travaille pour gagner le pain que je mange. »¹⁰

[...] 彼の唯一の隠れ家は友人のルイ・ビュイソンであって、彼は初日から相容れていた。ルイ・ビュイソンは 25 歳でピエール・アルディの事務所で製図家として働いていた。[...] 彼は「私はひと月に 180 フランを稼いでいる。私は庶民階級の間人であり、食べるパンを稼ぐ為に働いている。」と考えていた¹¹。

製図家であるビュイソンの月給は 180 フランである。現在の日本円に換算すると 180 フラン×501 円=9 万 180 円となる。他の登場人物の給与についても換算する。

[...] Marthe savait que l'on ne court aucun danger en acceptant l'invitation d'un jeune homme bien élevé. On s'assit, on causa. Il était ébéniste et pouvait faire des journées de sept francs à huit francs. Marthe était blanchisseuse et travaillait dans l'atelier où Blanche faisait son apprentissage [...] ¹².

¹⁰ *Bubu de Montparnasse*, p. 20

¹¹ 筆者訳

¹² *Bubu de Montparnasse*, p. 32

[...] マルトは育ちが良く若い男性の招待を受け入れても、全く危険を冒さないという事を知っていた。人々は腰かけて、話し合った。彼は家具職人で、1日に7フランから8フランを儲ける事が出来ていた。マルトは洗濯屋で、工場にはブランシュが見習いとなって勤めていた [...] ¹³。

劇中に登場する家具職人の男性は1日につき約7フランから8フランを稼いでいる。間をとって7,5フランと解釈すると7,5フラン×501円＝3,757.5円となり、1円以下を切り上げると1日につき3,758円となる。当時の若者の月給と日給が判明した上で、家賃の値段を解明する。

4-2. 家賃

[...] Il habitait, dans un hôtel meublé de la rue de l'Arbre-Sec, une chambre au cinquième étage. [...] Ici l'on vit, à raison de vingt-cinq francs par mois, une vie sans dignité. Les matelas du lit sont sales, les rideaux de la fenêtre sont gris comme un jour de vie pauvre [...] ¹⁴.

[...] 彼はアルブル・セック通りの家具付きホテルの6階に住んでいた。[...] ここでは、1か月に25フランの割合で品位のない暮らしで生活している。ベッドのマットレスは汚れ、窓のカーテンは貧しい生活の1日の様に灰色である [...] ¹⁵。

古びたホテルを住居としている描写であり、家賃が25フランと記載されているが、換算すると25フラン×501円＝1万2,525円である。当時の単身者向けの安価な物件の家賃は、前述した家具職人の日給の約3.3倍に相当する。現代の日本に置き換えると非正規労働者が8時間勤務を行った場合の3日半の日給が都市部における最安値のアパートの家賃と同

¹³ 筆者訳

¹⁴ *Bubu de Montparnasse*, p. 19

¹⁵ 筆者訳

等と解釈する事が出来る。次に食費について説明する。

4-3. 食費

[...] Ils dînaient ensemble dans un restaurant à vingt-cinq sous [...]¹⁶.

[...] 彼はレストランにおいて 25 スーで、共に夕食を取っていた [...]¹⁷。

レストランでの夕食が 25 スーと記載されているが、20 スーが 1 フランに相当するので 501 円である。残りの 5 スー分は 1 フランの 4 分の 1 であるので、 $501 \text{ 円} \div 4 = 125.25 \text{ 円}$ となるが、1 円以下を切り捨てると 125 円である。従って夕食代は 626 円と換算出来る。

前述したように家具職人の日給が 3,758 円であるので、レストランでの夕食の代金はおよそ日給の 6 分の 1 の金額である。従って 1 時間半分の時給と換算すれば現代の価値観と同等であると解釈出来るだろう。

『ビュビュ・ド・モンパルナス』に登場するフランの数値は、貧しい暮らしを強いられた登場人物に則している為、現代の日本円に換算しても、低い数値とならざるを得ない。

しかしながら給与を登場人物の 1 ヶ月分の所持金と捉えた上で、家賃や食費の値段を勘定すると現代の物価と同等になる事が判明した。

5. 貨幣経済の視点から分析するフランス文学研究の展望

筆者の記憶の限りでは、1803 年から第 1 次世界大戦が始まる 1913 年迄のフランス文学作品を貨幣経済の観点から分析された先行研究は、国内には存在しない。

本論では、シャルル＝ルイ・フィリップの 1 作品を分析対象としたが、1913 年迄の 111 年間には膨大なフランス文学作品が存在する。貨幣経済の視点から当時のフランス文学作品を分析した場合、現代の生活空間と

¹⁶ *Bubu de Montparnasse*, p. 98

¹⁷ 筆者訳

1803 年から 1913 年迄のフランス文学作品で描出された空間は別世界ではなく、同一の世界として認識出来るのではないだろうか。